

書評

川島秀一著

『津波のまちに生きて』（富山房インターナショナル）

橘川 俊忠（神奈川大学法学部 教授）

これは、津波で奪われた人と故郷の記録である。著者が最も親しくしていた人々への追悼の思いと、破壊された故郷の自然と生活への思いとが、著者をして筆をとることを促したのであろう。最愛の母親を失い、自宅は跡形もないほど津波に飲み込まれるという厳しい体験をした著者が、どのような思いで筆をとったのか、その思いにどれだけ心を寄せられるか、自らに問うばかりである。

しかし、著者の筆致は極めて平静である。慨嘆も、悲嘆も直接的に表現されることはない。海と共に生きる人々の生活と文化を調査し続けてきた著者の姿勢はいささかも変化していない。津波の後に書かれた前半の文章と、それ以前に書かれた後半のそれとは、対象に対する著者の透徹した感性を表現しているという意味で共通した筆致で貫かれている。

著者は、長年にわたり、三陸を中心とする漁業を主な生業とする人々の民俗文化の研究を続けてきた。その著者によれば、海と共に生きる人々は、海を漁業という生業の場として、あるいは漁獲という価値を生産する場としてのみとらえているわけではない。海と共に生きる人々は、漁獲という生活の資を与えてくれるだけでなく、時には荒れ狂い人の命さえ奪い取る恐るべき海という自然に対して、そこから恵みを得る知恵と畏敬の念というべき独特の心情とを育ててきた。また、海に生きる人間同士には、海を媒介にした独特のつながりがあるともいう。

しかし、現代の効率と利潤を求める風潮は、外部からは過疎化の波として、内部からは共同の習慣の喪失として、そうした三陸の海に生きる人々にも襲いかかっていた。高齢化、人手不足、漁獲高の減少など漁業をめぐる状況は年々悪化し、漁業は衰退産業とすらいわれるようになり、漁業を主な生業としてきた集落の中には、限界集落化するところも少なくなっていた。

そこにあの巨大な地震と津波が襲ったのである。とくに津波は、海岸沿いの集落を根こそぎ破壊した。人も、家も、船も、漁具も奪われ、港湾施設すら破壊された。しかし、その巨大な災害の中で、人々は惨禍を受け止め、

苦難に立ち向かう強い精神の力と団結する力を示した。世界から驚きの目をもって見られた、混乱を乗り越える力を発揮した。その力こそ、著者が長年の調査の中で見出した、海に生きる人々の知恵と勇気と海への思いであったのではなかろうか。

今度の津波は、たしかに予想をはるかに超える巨大な被害をもたらした。しかし、その津波が、海と共に生きてきた人々の中に血肉化された「知識と経験」とを呼び覚ましたといってもよいかもしれない。著者はいう、「津波に関わる伝承を集めながら、津波も『寄り物』の一種であることを捉えてきたが、『津波』も海と人間との関わりの一つのあり方であり、ヒステリックに津波との関わりを分断することからは何も生み出さないとと思われる。（中略）津波を含めた多くの災害と共に歴史を刻んできた、この列島の人々の災害観や自然観をまずは認めることで、さらに防災や減災の計画を立てていかなければならないだろう」と。この言葉の持つ意味は大きい。とくに、現地の意向を無視した、外部からの思いつきの復興プランの氾濫や復興予算に群がる政治家、官僚、業者の醜悪な現状を思うと、その感はずます強い。

「絆」という言葉が、まるで護符のように氾濫しているが、その言葉が、被災地域の人々の思いや実情を、その歴史的文化的背景を含めて理解することなしに発せられるとき、かえって被災地の絆を破壊することになるかもしれないことに思いをいたさなければならない。被災地の復興を願う者には、是非読んで欲しい一冊である。

